

氏 名	ひだか やす はる 高 庸 晴
学位(専攻分野)	博 士 (社会健康医学)
学 位 記 番 号	社 医 博 第 16 号
学位授与の日付	平 成 18 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	医 学 研 究 科 社 会 健 康 医 学 系 専 攻
学位論文題目	Substance use and sexual behaviours of Japanese men who have sex with men: A nationwide internet survey conducted in Japan (日本人の同性間性的接触者における薬物使用行動と性行動に関する研究 ——全国インターネット調査——)
論文調査委員	(主 査) 教 授 中 山 健 夫 教 授 林 拓 二 教 授 松 岡 雅 雄

論 文 内 容 の 要 旨

背景：わが国の HIV 感染者及び AIDS 患者数は、同性間感染を中心に増加の一途にあり、同感染経路による感染は、2005年に報告された男性 HIV 感染者の約 7 割、AIDS 患者の約 4 割を占めるに至っている。それゆえ、同感染経路による感染の防止は現段階のわが国の HIV 流行の抑制にとって最重要課題であるが、根強い社会的差別・偏見やそれに対する不安等に阻まれ、同性間性的接触を行う人々（以下、同性指向者）に対しては質問票調査すら困難な状況が続いてきた。欧米でも事情は変わらず、一部の都市を除けば、実態把握は遅れていたが、近年インターネットの利用が急速に広がり、薬物使用者や同性指向者など、アクセスの困難な集団に対する有力な調査手法として、それを用いた行動実態等の学術報告が増えつつある。しかし、アジアでは日本を含め、同種の調査は皆無であった。

目的：インターネットを使用するわが国の同性指向者における薬物使用の実態とその関連要因を探索すること。

対象と方法：調査は、厳格な情報保護措置を講じた調査専用サーバー上のホームページに、重複防止措置を講じた無記名自記式質問票を2003年2月末から2.5ヶ月間掲示し、参加募集を57の同性指向者の閲覧するウェブサイトに行うことによって実施した。質問票は事前に実施した質的研究の結果を用いて開発し、基本属性、抑うつ尺度（日本版 SDS）、HIV/性感染症（STD）既往歴、HIV 検査受検歴、薬物使用歴、性行動、HIV/STD 関連知識などで構成した。調査には2195人が回答し、適格基準を満たす2062人分の回答を分析に供した。

結果：参加者の45.8%（945人）が1種類の薬物使用経験者（以下、単剤使用経験者）で、19.6%（405人）が2種類以上の薬物使用経験者（以下、多剤使用経験者）であった。使用薬物中最も多かったものは、Amyl nitrites（63.2%）、5MEO-DIPT（9.3%）、大麻（5.7%）で、heavy drug に属する 5MEO-DIPT はほとんど多剤使用経験者で用いられていた。自己申告による HIV 感染率は、全体で2.8%、非薬物使用者で0.7%、単剤使用経験者で2.3%、多剤使用経験者で7.4%であった。薬物使用に関連する要因を多重ロジスティック回帰分析で分析したところ、単剤使用経験には、無防備な性行動、多数（ ≥ 6 ）の性的パートナー、風営施設利用、学歴（高卒以下）、30歳代が有意に関連し、多剤使用経験には、それ以外に、不特定パートナーの存在、抑うつ傾向、HIV 感染、高い HIV/STD 予防知識が有意に関連し、特に HIV 感染が高い関連（調整オッズ比=7.78）を示した。

考察：以上、本研究により、同性指向者の集団の中で、薬物が広く用いられている可能性があること、薬物使用者では、活発で無防備な性行動が集中し、特に多剤使用経験者ではその傾向が強く、かつ抑うつ傾向や HIV 感染も集中していることが示唆された。調査の性格上、選択バイアスを考慮する必要があるが、本研究は、同集団における薬物使用行動や性行動に関する探索的データを提供したアジア最初のインターネット調査となった。現在わが国では同集団に対するコミュニティベースの予防対策が試みられつつあるが、本研究は、そうした取り組みにおいて、薬物使用者について特に予防的アプローチが必要であること、とりわけ多剤使用経験者では、抑うつ傾向や HIV 感染に対する心理的ケアが必要であることを示唆するものとなった。

論文審査の結果の要旨

わが国の HIV 感染の約 7 割を同性間感染が占め、増加の一途にある。その予防は急務であるが、社会的偏見に阻まれ調査は困難であった。欧米では近年、薬物使用者や同性指向者などアクセス困難な集団に対するインターネットによる学術研究が増加しているが、アジア及びわが国では乏しい。そこで本研究は、同性指向者の薬物使用の実態及び性行動や HIV・性感染症との関連を解明するために、厳格な情報保護措置の下、インターネットによる無記名自記式調査を実施した。適格基準を満たす有効回答者 2062 人の内、経験した薬物が 1 種類の者（単剤使用経験者）は 45.8%，複数の者（多剤使用経験者）は 19.6%，未使用者は 34.6% であった。使用薬物は、Amyl nitrites 63.2%，5MEO-DIPT 9.3%，大麻 5.7% 等であった。多重ロジスティック回帰分析から、単剤使用経験には、無防備な性行動、多数の性的パートナー、風営施設利用、学歴、30 歳代が有意に、多剤使用経験には、それらに加えて、不特定パートナーの存在、抑うつ傾向、HIV 感染既往、高い予防知識が有意に関連することが示され、特に HIV 感染既往が高い関連（調整オッズ比=7.8）を示した。以上の研究は、わが国の同性指向者において薬物使用が無防備な性行動や HIV 感染と強い関連を持つという社会医学的及びエイズ予防対策上重要な事実を初めて明らかにしたものである。

したがって、本論文は博士（社会健康医学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお本学位授与申請者は、平成 18 年 10 月 31 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。